2026年11月2日（月）

週刊循環経済新聞掲載



週刊 循環経済新聞　2026年（令和8年）11月2日（月曜日）　（6）

日本シーム

学生が資源循環のアイデアを発表

ピッチコンテストを初開催

日本シーム（埼玉県川口市、木口達也社長）は9月、東京都内の会場で学生ピッチコンテスト「循環MIRAI学生ピッチ2026」を開催した。当日は書類審査を通過した高校生から大学院生の学生ら11人が出場。環境・リサイクル・サーキュラーエコノミーに関する革新的なアイデアを持つ学生たちが、審査員を前にプレゼンテーションを行った。木口社長は冒頭、学生と審査員、関係者に感謝を伝えたうえで「長年リサイクルの現場に向き合ってきたからこそ、これからの循環問題は今までの延長線上だけでは解決できないと感じている。若い世代ならではの自由な発想を学びたいと考えたのが、この大会を開催した大きな理由だ」と述べた。

学生ピッチの前に行われた基調講演では、石塚化学産業会長の石塚勝一氏と日刊工業新聞社編集委員の松木喬氏が登壇し、それぞれ講演した。

学生によるピッチでは医療廃棄物や生分解性プラスチック、農業用マルチフィルム、衣類ビジネスに着目したものまで、さまざまなピッチが行われた。審査員からも旺盛な質疑応答が行われ、活発な議論が交わされた。最優秀賞は「里山と沿岸をつなぐ循環型肥料」と題してピッチを行った佐々木太開さんが受賞した。

審査員の綿本則夫氏（湘南貿易社長）は講評で「自分たちの中では考えも及ばないようなアイデアがたくさん出てきた。学生の皆さんには感謝を伝えたい。今後、今回のアイデアの実現に向けてチャレンジを継続してほしいと思う」と述べた。

会場のようす

環境教育授業を実施

ミダックホールディングス

ごみ削減を小学生に

廃棄物の収集運搬・中間処理・最終処分事業を展開するミダックホールディングスは10月2日、浜松市立有玉小学校の4年生約90人を対象に同社の新入社員9人が環境教育授業を実施した。

環境教育授業は今回で15回目となった。今回は子どもたちの環境への意識を高めるため「ごみの削減」をテーマとしたワンアクションをテーマとしたごみを出した場合の行方を分かりやすく説明したり、ごみを減らすための方法についてグループワークを行った。

授業のようす

記者手

一昔前と異

本国内にお

いてM&A

が増えてい

る。売上高

が大きく一

般的に名の

知れ渡った企

っても気づ

の企業の業下

ている例も珍

くなった。廃

理・資源循環

例外ではなく

ウインテック（大阪府茨木市、松本健太郎社長）集まる「非認知能力」の向上が期待される。

・溝を使う・バランスかぬてより一体感の自ら考え行動できを取るという多様な遊コンサルタント業を営になってほしい」

総合・適正処理